

短 報

聖路加国際大学における 学部科目「サービslラーニング」の現状と課題

高橋 恵子¹⁾ 武石 典史¹⁾ 大久保暢子¹⁾ 松谷美和子¹⁾
田代 順子¹⁾ 大垣 尚子²⁾ 宮崎 純子³⁾

State of the Art of the “Service-Learning Course” at St. Luke’s International University

Keiko TAKAHASHI¹⁾ Norifumi TAKEISHI¹⁾ Nobuko OKUBO¹⁾ Miwako MATSUTANI¹⁾
Junko TASHIRO¹⁾ Naoko OGAKI²⁾ Junko MIYAZAKI³⁾

[Abstract]

This report briefly describes the present situation, problems and solutions of the service-learning course, in the undergraduate nursing education in Tokyo, Japan. The focus of this report is on our activities in the first three years. Service-learning is an educational approach originating in the United States that integrates classroom learning with social activities. It was first introduced into the undergraduate nursing curriculum in 2015, based on our previous studies and education with student volunteers. It is offered to first- and second-year students as an elective course, having the goal of fostering their civic and social responsibility for their future nursing careers. The program includes 1) e-learning, 2) classroom lessons, 3) volunteer activities, and 4) reflections. We obtained regional cooperation for 2) and 3). It strengthened the university-community partnerships in 2016. For further improvement of the curriculum, in 2017 we connected with an international service-learning program in the Philippines, which enables students to continue participating in community service. The fact is that the service-learning course has grown over the past three years. However, students have hesitated to register for the course because they are not aware of the advantages of the program. Therefore, our future plans are to redesign the course to be more attractive to students, and also to be more valuable for our community.

[Key words] service-learning, volunteer activity, college of nursing

[要 旨]

聖路加国際大学では、サービslラーニング先進国である米国の取り組みを基に学生のヘルス・ボランティアに関する研究が始まった。その後、研究成果を基盤にボランティアを行う科目が新設され、2015年度に「サービslラーニング」が開講した。本科目は、e-learningを含む自己学習・座学・ボランティア実習・仲間との共有など、様々な方法での学習により社会人としての素養を養う科目であり、看護専門職に就く前の準備学習として位置づけられている。

保健医療福祉に関わる専門職者になる聖路加国際大学の学生にとって、国の制度や既存の社会資源、奉

-
- 1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke’s International University, Graduate School of Nursing Science
 - 2) 聖路加国際大学看護学部(臨時助教)・St. Luke’s International University, College of Nursing (part-time assistant professor)
 - 3) 元聖路加国際大学看護学部(臨時助教)・Formerly, St. Luke’s International University, College of Nursing (part-time assistant professor)

受付 2017年10月27日 受理 2017年11月22日

仕活動に目を向けることは非常に重要であり、本科目は社会人としての自分をみつめる機会や責任ある行動を学ぶ重要な実習科目であると言える。今後は、「魅力ある科目への変革」を目標に新たなプログラムの増設や、受講生の拡大に取り組むと共に、地域における聖路加国際大学の存在価値を高めていくことが求められる。

〔キーワード〕 サービスラーニング, ボランティア活動, 看護学部

I. はじめに

サービスラーニングの概念は国内外でさまざまな定義がなされている。聖路加国際大学では、文献検討と米国大学におけるサービスラーニングの理念と取り組みの情報を基に、大学の教育目的を統合し、サービスラーニングの定義を「地域社会のニーズに沿ったサービスに参加することによって、意図的になされる経験学習であり、コースの教育内容を深め、市民としての責任感、社会的価値を高めるような大学と地域とのパートナーシップあるいは連携によってなされる教育プログラム」¹⁾とした。そして、2015年度から聖路加国際大学看護学部「サービスラーニング」という新たな科目が開講された。

この科目の発展には、2002年からの「学生ヘルス・ボランティア」に関する文部科学省科学研究助成による研究と教育経験の蓄積があった²⁾。2002年当時、1995年の阪神淡路大震災により、学生を中心としたボランティア・ムーブメントがあり、聖路加看護大学においてもボランティア活動が活発に行われていた。加えて、聖路加の学生も、中学や高校でボランティアあるいはサービスラーニングを経験して大学に入学していた。また、学生は、1年生の専門知識のない段階から、在宅ケアが必要なボランティア活動に参加し、活動の意義を感じる一方で、活動の準備とさらなる学習の必要性を感じていた。その中で、研究成果を基礎に、2009年から1・2年生対象の総合科目「ボランティア活動学習」(総合科目:生活科学論)を開講した。当時の総合科目では、研究成果から、Web上におけるヘルス・ボランティアガイドとして、基礎情報が得られる、1)ヘルス・ボランティア準備、2)ヘルス・ボランティアを始めるための共通知識(発達段階を踏まえた対象・家族の理解と関わり、安全を確保するための技術、コミュニケーションスキル)、ボランティア活動からの学習を促進する、3)プラクティスログ、を準備した。そして、2009年から2013年までの5年間は、e-learningプログラムを使い開講していた³⁾。そして、カリキュラム改正を機に、2015年から新たな科目として「サービスラーニング」が開講された。

そこで、本稿では、本科目の導入期の2015年から2017年までの3年間の取り組みを紹介し、その課題と展望について報告する。

II. サービスラーニング科目の導入(2015年度)

1. 科目の立ち上げ準備

1) サービスラーニングとは何かを考える

サービスラーニング科目を聖路加国際大学で開講するために、3名の科目担当者でまず行ったことは、「サービスラーニングとは何か」、「聖路加でサービスラーニングを立ち上げる重要性和意義」についての考えをまとめることであった。そのため、科目開講前に文部科学省科学研究としてまとめられた研究報告書を読み、また国内外のサービスラーニングに関する論文や図書を文献検討することで考えを深め、「サービスラーニング」の定義¹⁾を確認した。そして、本科目は社会人としての素養を養う科目であり、看護専門職に就く前の準備学習として位置づけ、これらがシラバスの学習目標と到達目標に繋がることとなった。また経験学習であることに重きを置いていることから、2単位、90時間の実習科目とし、対象を看護初学者である看護学部1、2年生とした。

2) 単元の内容、順序性を考える

受講する学生が「サービスラーニング科目とは何か」、「学部カリキュラムでの位置づけ、意義」を理解できるように、第1回目の授業はイントロダクションとし、2、3回目は、「ボランティアとは何か」、「ヘルス・ボランティアとは何か」を自己学習し、4回目に学習内容をシェアするためのワールドカフェ形式のアクティブラーニングを設定した。第5～15回までをボランティア活動の時間に割り当て、学生は、45時間分の活動を行い、実際の活動についてリフレクション・サイクルを通して学びを深めることとした。そこで、最低6回分の「振り返りの記録」(以下、リフレクション・ログ)の報告を提出物として課した。本科目では、リフレクション・ログとグループシェアの2つの方法を活用している。

ボランティア活動の中間時点の第9回目に学生に集合してもらい、体験の共有を行う時間を作った(写真1)。最終回には、「ボランティアとは何か? 市民の生活とヘルス・ニーズ、市民の責任について」のグループワークを行い、ポスターシェアで共有を行うこととした(写真2)。

3) ボランティア先の確保と連携

聖路加国際大学の地域貢献の意味合いもあり、中央区

ボランティア団体と社会福祉協議会に協力を要請し、計24団体がボランティア受け入れ先として了承して下さいました。学生がもともとボランティア団体に所属している場合もあるため、学生自らが自主的にボランティア先を確保することを前提とし、確保できない場合は教員から紹介することとした。このボランティア先の紹介を中央区に依頼したことがきっかけで、本科目の実施にあたり、打ち合わせ、学生やボランティア先の感想共有を行う機会を得、大学と地域との繋がりが強化できた。また、聖路加国際大学で運営されているコミュニティーベースの市民を対象とした健康支援事業（13事業）と、学生が立ち上げた入院患児の家族のサポートボランティア活動（1団体）のフィールド協力も得られた。

4) ボランティア実施に際するマナー／倫理教育、学生の安全保障について

本科目は、看護学生としてボランティア先に実習として出向く内容であることから、ボランティア先でのマナーや個人情報の保護、学生の身の安全や事故時の対応についても事前に整えておく必要があった。まして看護初学者であり、初めて施設で活動する科目であることから、様々な事故が想定される状況であった。まずはボランティア先に出向く前に、担当教員作成のe-learningでマナーと倫理教育を学習することを課題とした。内容は、「活動における連絡・報告・相談」、「活動先で得た情報の取り扱い」、「活動にふさわしい服装、行動、態度」、「活動の記録の書き方」、「ハラスメントに遭遇した場合の対応」、「データの取り扱い」について主に示されている。このe-learningでは、9割以上正解しなければボランティアに出ることはできないという規則を作り管理した。またボランティア先での学生の安全保障については、ボランティア保険への加入を大学側で行った。

5) 教職員への周知

本科目は、全教職員で取り組む科目とし、サービスマーケティング科目担当教員とは別に、学生1名に1名のリフレクション・ログ担当教員が割り当てられる。ログ担当教員は、e-learning形式によるログを通して学生に振り返りや気づきを促し、さらには計画の再設定を行う。また教務課が連絡窓口となる体制ですすめることになった。科目担当教員だけではなく、全教職員に科目概要と方法を理解してもらう必要があったため、本科目導入にあたり全教職員への周知として、教員の教育能力を高める実践方法と職員の資質向上のための実践方法に取り組むFaculty Development・Staff Development (FDSD) 委員会を通じて説明会を複数回実施した。

2. 初年度実施後の課題

初年度実施を終了し、課題となった点は、1) 45時間のボランティア時間が多く、他時間割と両立することが



写真1 体験の共有

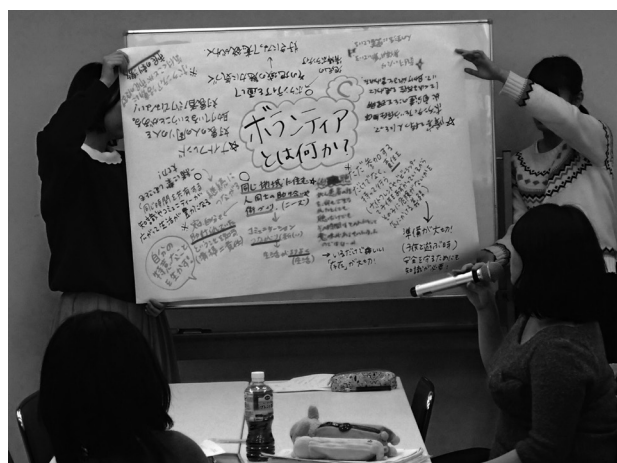


写真2 ポスターシェアの授業風景

困難であったこと、2) 全教員に本科目を周知するには至らず、ログ報告への返信等で教員、学生の双方に疑問が残ったことであった。

Ⅲ. 大学と地域との連携の強化（2016年度）

2016年度は、学生がボランティア活動時間を半期で到達する難しさへの対策と、大学と地域との連携科目として強化することを意識し、初年度（2015年度）の枠組みを基に進めた。

1. 2016年度の授業内容と展開方法の紹介

1) ボランティア知識を深めるための事前・自己学習

初回授業では、科目担当教員よりサービスマーケティングの概要を説明した。2回目の授業では、前年度にサービスマーケティングを履修した先輩在校生を授業に招き、「サービスマーケティングでの体験と自身の学び」についての話をしてもらった。3回目では、大学と地域との連携を目的に、中央区社会福祉協議会の職員と、その社会福祉協議会に登録する市民ボランティア2名を招き、職員の方から「社会福祉協議会とは」、「ボランティアとは」について、ボランティアの方からボランティア活動の体験を紹介していただいた。授業開始1カ月間は、サービスマーケティングに関連する書籍（約30冊）を、「図書フェア」と称

して大学図書館に展示し、学生がボランティア活動前に関心を持ったテーマの本を読み、事前学習ができるような環境を提供した。その後、学生は各自が行う e-learning による倫理マナーのテストを受講し、合格後、ボランティア活動を開始した。

2) ボランティア活動の実際

学生は中央区社会福祉協議会が発行する「ボランティア・ガイドブック」などを参考に、自分でボランティア先を選び、連絡を取り、活動する。科目でのボランティア活動時間は、40時間程度として学生に提示し、2016年度から4時間の活動は、大学内にある市民健康情報サービス事業（「聖路加健康ナビスポット：るかなび」）を活動フィールドとして指定した。その理由は、このフィールドが学内にありながらも、自治体主催の健康福祉祭りにも参加するコミュニティーベースの健康支援事業であり、かつ平日毎日運営していることから、学生が授業の空き時間を利用して気軽に活動できるフィールドとして、学生からの評判が良かったからである。1つは活動する場所が決まっていることで学生は焦ることなく、他の活動先を探し、40時間程度という活動時間を達成する上での対策にもなっていた。学生は、おおよそ1人約3カ所で活動をしていた。学生が実際に活動した先は、科目指定したフィールド以外に、社会福祉協議会に登録されたボランティア団体（「障がい者ダンス推進ボランティア団体」や「朗読ボランティア団体」）、さらに、自分が住む地域で見つけたボランティア活動（「地元の餅つき大会」、「小学校周辺の花壇作り」）などであった。地元でのボランティアは、地域活動に関心を持ち、自ら地域の掲示板や回覧板で情報を見つけて、参加していた。

3) 活動後のリフレクション学習

初年度のリフレクション・ログは、活動終了毎に提出することを提示したが、学生の負担感と提出枚数に個人差の不公平感の声があったことから、2016年度は、活動毎のリフレクションは個人の記録程度にとどめ、ログの提出を活動10時間毎に修正した。また、ログの用紙は、「活動内容と状況」、「今回の諸活動が地域社会にとって、自分にとってどのような意味があるのか」、「今後に向けて」の3点に絞った用紙にした。経験学習による気づきを深めるために、2016年度以降もログ以外に、活動の中間時期に教室に集合し、グループシェアを通してリフレクションを行い、他の学生の活動体験と学びを共有する機会を持った。学生は、「リフレクション・ログを用いて活動や経験を振り返ることで、より深いところまで掘り下げて考察することができた」と感想を残していた。

4) 学習の統合

科目最終日は、教室に集合し、学生は事前・自己学習とボランティア体験、更にリフレクションを通した学びをまとめ発表した。2016年度は、初期の授業に講義をし

ていただいた中央区社会福祉協議会の職員と登録ボランティアを発表の場に招待し、招待者を含めた参加者全員で「地域社会の中でなぜボランティアが必要とされているのか」について話し合い、それぞれの立場でできることを共有し合う時間を取り入れた。この科目の魅力の1つが、ボランティアをする地域住民と地域社会の課題をサポートする社会福祉協議会と、将来看護職を目指す学生と教員が、同じ課題について様々な経験から考えを語り学び合う点であった。最終授業後、学生は、ボランティアの経験学習を統合し「市民の生活やニーズ、市民の責任」のテーマでレポート提出し科目を終えた。

本科目を受講した学生は、「社会の課題やニーズに取り組むことによって、なぜ課題が生じているのか、背景や社会状況を肌で感じ納得した」、「ボランティア仲間や活動で関わった人との会話を通じて、様々な経験を教わり、人の多様な生き方や考え方を知った」、「他人の考え方や感じ方を知るため、これまで以上に様々な人と積極的に関わるようになった」とサービスマーケティングでの学びについて感想を残した。サービスマーケティングは、聖路加国際大学の看護学部の中核概念である People-Centered Care (PCC)に通じるものでもあった。



写真3 サービスラーニング図書フェア



写真4 地域のボランティア活動に参加した学生

IV. CUAC サービスラーニングとの連動 (2017年度)

聖路加国際大学は、サービスラーニングのさらなる発展を追求すべく、様々な可能性を検討してきている。その一つが、CUAC サービスラーニングとの連動である。

CUAC とは、世界聖公会大学連盟 (The Colleges and Universities of the Anglican Communion) の略称であり、聖公会の支部として位置づいている。世界各国の131校以上の高等教育機関によって構成されるCUACは、異文化間交流や教育プログラムの推進に取り組むとともに、世界の学生が相互に理解しグローバルな視野を持つためのサポートに力を入れている。

このCUACのアジア支部校の協力のもとで実施されているのが、“CUAC INTERNATIONAL SERVICE – LEARNING” (以下、CUAC SL と略記) にほかならない。アジア・トリニティ大学 (Trinity University of Asia, フィリピン) を中心に、フィリピン、台湾、香港、韓国、日本の聖公会系大学の学生が2週間にわたって協働で実習するのである。

聖路加国際大学はCUAC SLの意義を重視しており、国際連携センターが中心となって学生を送り出している。このプログラムへの奨学金支給制度が定着したこともあり、ここ3年における同大学からの参加者の推移をみると、2015年5名、2016年7名、2017年10名と増加傾向にある。

では、“CUAC SL 2017”を例にその活動内容をみてみよう。同プログラムは2017年2月11日から2月25日にかけて、アジア・トリニティ大学をホスト校に、聖公会大学 (Sungonghoe University, 韓国)、立教大学、立教女学院短期大学、聖路加国際大学の学生の参加のもとで開催された。

初日からフィールドに出るわけではなく、まずはトリニティ大学で「環境と教育」の講義を受け問題意識を固めつつ、日韓比学生混合のグループを作りそれぞれの活動計画を立てる。それをふまえてコミュニティワーク (スラムでのボランティア活動) がスタートする。

コミュニティワークは午前中に設定され、たとえばあるグループはスラムで母親たちを対象に啓発活動 (栄養・健康教育) に取り組む。また別のグループは幼稚園児たちと一緒に歌を楽しんだりゲームをすることを通して、小学校で求められるマナーやゴミの分別などを教える。午後はトリニティ大学に戻り、グループワークにて午前中の活動のリフレクション、さらには次回の活動計画についてのディスカッションを行う。いわば、「社会貢献をしながら学び、学びながら社会貢献を」というエキサイティングなサイクルを学生たちは経験するのである。

聖路加国際大学は、CUAC SLに参加しただけでは単位を認定していない。その取得に際しては、学部科目

「サービslラーニング」を履修し3回の講義を受けたうえで、4時間以上のボランティア活動、そして最終レポートの提出、という要件をクリアする必要がある。講義では、ボランティア先との交渉方法といった手続きに関するレクチャーを受けつつ、われわれが住む地域におけるボランティアの実情・市民性および社会のニーズについての認識を深めることに力点を置いている。4時間以上の活動をオブリゲーションとしたのは「継続性」を重視したからである。

CUAC SL 2017に参加し、かつ「サービslラーニング (2017年度前期)」を履修した学生たちの主な活動先は「子ども食堂」、「児童館」、「外国人介護職員支援団体 (介護士を目指すフィリピン人への日本語指導)」であり、活動時間はおおむね10時間程度、なかには30時間を超える学生もいた。CUAC SLは、聖公会という同じ理念を有した大学の学生であるという精神的なつながりを実感させるだけでなく、「帰国後もボランティア活動を継続しようとする意欲」を湧き立たせるインパクトがあったといえよう。

V. 聖路加国際大学看護学部「サービslラーニング科目」の課題

サービslラーニングは、大学と地域との連携した授業が最大の特色であり、学生の学びも大きい科目である。しかし、聖路加国際大学のサービslラーニングは、選択科目のため、全員が履修するわけではない。本科目は、講義への参加、ログの提出、最終レポートに加えて、地域でのボランティア活動を40時間程度行うことが課せられる。看護学生は必修科目が多く、過密な時間割の中で、現実的にボランティア活動時間を確保することが難しい科目となっている。そのため、学生に科目の魅力が伝わらず、開講初年度は30名以上の履修者がいたが、2年目以降は、履修者が10名にも満たないことが大きな課題である。

CUAC サービスラーニングとの連動についても簡単に述べておきたい。現在、想定されているのは、上述のように、フィリピンでの活動 (CUAC SL) から地域での活動 (学科科目「サービslラーニング」) へ、という図式である。この選択肢だけでなく、これとは逆のベクトル、すなわち「サービslラーニング」(地域) からCUAC SL (世界) へ、というオルターナティブを模索することが求められる。最終的には、プログラムや授業から離れたところで、学生が自発的・日常的に地域、そして世界に目を向けながら、市民としての自己の在り方を問い直すことができる、そうした思考様式・行動様式形成の土台の場としての役割を担うのが、学部科目「サービslラーニング」の目指すところとなろう。

Ⅵ. 聖路加サービスマーケティングの展望

この科目は、社会人としての自分をみつめる機会を提供する重要な実習科目である。特に、高校から大学に直接進学した社会人経験のほとんどない学生には、実習に入る前の科目として選択するよう強く推奨している。

国の制度や既存の社会資源ではサービスが行き届かない人々がなぜ存在するのか、なぜ奉仕活動が必要なのか、そうした問いを持つことが、保健医療福祉に携わる職業人としてのスタートには重要である。

また、そうした疑問を持つに至らずとも、人々の利益のために専門的な知識や技を提供する職業人として、責任ある振る舞いを学ぶ機会としても重要である。止むを得ず遅刻や欠席をするときの相談・報告・連絡、挨拶や会話、周囲の人々と良好な関係を築く力を養う機会となる。

最後に、この科目の構想、提案、そして導入の三面全てに直接的に携わった者として、今後の展望を示しておきたい。

サービスマーケティングの魅力を高めていくためには、やはり変革が必要となろう。この科目に「地域健康フェアの開催」というプログラムを新たに設け、学部生から大学院生までの選択科目とする。そして、大学院生がリーダーとなり、地域のニーズ調査から健康フェアのプログラム作り、健康フェアの開催、成果の公表までを学生全員で分担する。これにより、学生は、地域住民の健康ニーズを理解し、住民自らの健康形成力を引き出すような計画を立てて実施し、最適な保健医療サービスを提言できるようにになると考える（図1）。

この過程で学生はリーダーシップ、ヘルスアセスメン

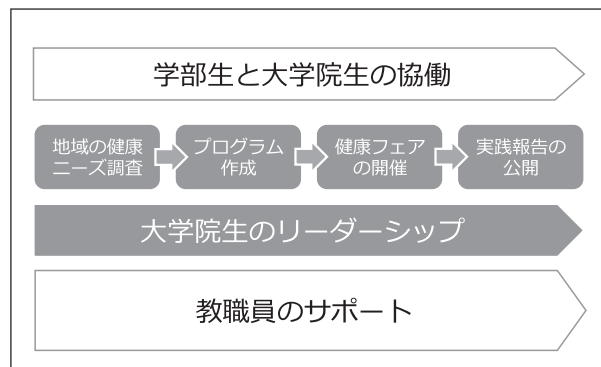


図1 サービスラーニング・プログラム：地域健康フェアの開催

ト、健康診断や健康教育の準備と実施、地域の保健医療資源の情報、意味ある情報の発信などの多くを学ぶことができる。年1回の開催からはじめて、回数を増やせば、地域での聖路加国際大学の存在価値も高まる。実効のある充実した科目になるに違いないだろう。

文献

- 1) 松谷美和子ほか. 看護教育法としての「サービスマーケティング」実践研究文献レビュー. 聖路加看護大学紀要. 2004; 30: 31-38.
- 2) 田代順子ほか. Webによるサービスマーケティング（総合科目Ⅲ 生活科学編）の初年度の科目の進め方と評価. 聖路加看護大学紀要. 2011; 37: 25-30.
- 3) 田代順子. ヘルス・プロフェッショナル育成のためのe-サービスマーケティング・プログラムの開発研究過程と学び. 聖マリア学院大学紀要. 2012; 3: 3-8.